

「脱炭素おおいそ町民会議」 第2回 会議録

1. 概要

日 時 : 2025 年 8 月 24 日(日) 13:00~16:00

会 場 : 大磯町保健センター 2 階研修室

参加市民 : 32名 (欠席者:3名)

情報提供者: 稲田素子 (脱炭素おおいそ町民会議実行委員会事務局/IDEP 理事)

柳下正治 (脱炭素おおいそ町民会議実行委員会事務局/IDEP 代表理事)

全体ファシリテーター : 徳田太郎 (ユニベルシタスつくば/VOICE and VOTE 代表)

主催者 : 実行委員会委員: 松浦治美、岡部幸江、オダギリミホ、加藤洋、半田志野、八尋陽子

大磯町: 磯崎清彦、飯塚真生

神奈川県: 松田泰弘、稲益司、佐々木敬太

グループファシリテーター、IDEP 職員等

2. 本日の目標(ゴール)

- ・「脱炭素アクション(改訂版)」への理解を深める
- ・各自が挑戦する「脱炭素アクション」を決める

3. 実施概要

〈タイムスケジュール〉

時刻	内容
13:00	開会挨拶
13:05	オリエンテーション
13:10	チェックイン
13:15	情報提供①大磯町の地域情報
13:30	情報提供②脱炭素アクション
13:50	グループ対話 (情報提供への質問を共有)
14:05	質疑応答
14:20	移動・休憩
14:35	脱炭素アクション役割分担の説明
14:45	グループ対話 (脱炭素アクションを分担)
15:35	移動・休憩
15:40	脱炭素アクションへの取り組み方
15:55	チェックアウト
16:00	終了 / 放課後タイム(希望者で歓談)

(1) 開会挨拶

はじめに、脱炭素おおいそ町民会議実行委員会副委員長岡部幸江氏より開会あいさつが行われた。酷暑の中出席した参加者に感謝の意を表した上で、自らが参加する市民団体の活動経験を通じて、集団の中で何かを決めることの難しさを感じている点に触れた。その中で、この町民会議の民主的な対話の場の意義を深く感じ、本会議に期待を寄せていると述べ、開会のあいさつとした。

- (2) **オリエンテーション**(ユニベルシタスつくば/VOICE and VOTE 代表 徳田太郎氏)
全体ファシリテーターの徳田太郎氏から、全6回の市民会議の趣旨の共有が行われ、続いて今回の会議の趣旨が伝えられた。

- (3) **自己紹介とウォーミングアップ**
グループ内で「呼ばれたい名前」、「この3週間に起きたトピック」を話し、ウォーミングアップを行った。

- (4) **情報提供① 大磯町に関する基礎情報**(脱炭素おおいそ町民会議実行委員会事務局/一般社団法人環境政策対話研究所(IDEP) 稲田素子)

大磯町がどのような特徴・特性を持つ街であるか等、特に脱炭素に関わる要素を中心に大磯町に関する基礎情報について情報提供が行われた。大磯町の自然条件、人口や年齢構成、土地利用、移動に関わるインフラの状況、住宅、農業・漁業、ごみに関わる情報まで、近隣都市との比較や将来的な予測のデータと合わせて共有が行われた。

- (5) **情報提供②「脱炭素アクション」改訂版**(脱炭素おおいそ町民会議実行委員会事務局/一般社団法人環境政策対話研究所(IDEP) 代表理事 柳下正治)

第一回会議で提示された25項目からなる「脱炭素アクション(案)」から、20項目の「脱炭素アクション」改訂版についての説明が行われた。20項目への絞り込みに関しては、第1回会議における参加町民からの以下に示す3つの意見・反応等を検討し改定したとの説明がなされた。

- ① 前回会議における参加町民の25項目の脱炭素アクション案に対する率直な意見や気づき
- ② 25項目の脱炭素アクションに対する自己点検の結果
- ③ 25項目の脱炭素アクションに対して追加すべき項目の提案

次いで、今回の会議では参加町民1人につき3項目を目標に、今後実践するアクションを改訂版から選ぶというグループワークをお願いしたいとの依頼がなされた。なおその際にすぐに実践できない項目については、「その項目を実践する場合どのような障壁があるか」ということを自分・身の回りと考えたことを「実践」の一部とすると補足した。

続いて、「脱炭素アクション」改訂版の20項目に絞り込んだ理由として、25項目のアクションに対する町民による自己点検の結果から、既に多くの参加者が習慣として実践できている項目等については、対象から省いたなどの説明がなされた。

「脱炭素アクション」改訂版 20項目

脱炭素アクション		説明・事例
住 ま い	1. 自宅を省エネ化し、断熱リフォームする	窓、外壁、天井、床等の断熱リフォームを行う。専門家のアドバイスを得て自ら断熱DIYを行う
	2. 自宅に太陽光パネルを設置する	
	3. 自宅の電力を再エネの契約に切り替える	小売電気事業者が提供する「再エネ電気プラン」を選ぶ
	4. エコライフを実践する	・自宅でコンパクトな住まい方:家庭内のクールシェアで、冷暖房や照明に必要なエネルギーを減らす ・家族が間隔を開けずに入浴し、追い炊きを減らす

	5. <u>水循環・緑を利用した身近なヒートアイランド対策に取り組む</u>	敷地の緑化、屋上緑化、雨庭の整備、雨水浸透柵の整備により、住宅地の気温上昇を抑制する
消費	6. <u>ゼロウェイスト・ショッピングに挑戦する</u>	耐久性の有る製品や、修理・交換し易い製品を購入する
	7. <u>使い捨てプラスチック製品をもらわない・使わない</u>	マイバッグ持参でレジ袋を減らす、使い捨てスプーン・フォークを断る、容器・包装を簡略化した商品を選ぶ、マイボトル持参で容器ごみを減らす等
	8. <u>環境ラベルの付いた製品等、環境負荷の小さい製品を購入する</u>	エコマーク、グリーンマーク、間伐材マーク、省エネラベル、カーボンフットプリントが掲げられた製品等
	9. <u>旬産旬消・地産地消に配慮された食材を購入する</u>	旬の野菜・果物を食べ、地元生産の農作物を購入
	10. <u>食品ロスをゼロにする</u>	水切りの徹底、コンポストやキエーロの導入により生ゴミの減量化、フードドライブやフードシェアリングの活用
	11. <u>衣服のリペア、リユース、リメイク、アップサイクルに取り組む</u>	良い物は長く着たり、必要なくなったものはリユース、リメイク、アップサイクルする
	12. <u>食事を菜食や代替品に替える</u>	肉・魚の代わりに、乳製品・卵、豆類、穀物、野菜、代替肉を食べる
移動	13. <u>電気自動車(EV)の利用を進める</u>	燃料電池車等の次世代自動車も含む、自家用車をEVに、カーシェア・レンタカーはEV
	14. <u>町内や近隣都市等への移動には鉄道・バス等公共交通機関を使う</u>	コミュニティバスや、ライドシェアも含む シェアサイクルも含む
	15. <u>日常の買い物や地域内移動は徒歩・自転車利用とする</u>	
	16. <u>ライフスタイル、買い物の工夫により、移動そのものを減らす</u>	日用品等のまとめ買いで自動車利用を減らす、徒歩圏内のお店を利用する、食材の共同購入・ネットスーパー・ネットショッピングを利用し宅配は必ず受け取るなど
吸収源	17. <u>持続可能な里山・緑地の管理に参加し、庭の管理を行う</u>	里山・里地・緑地・庭の管理、樹木の間伐と再生のバランス、生物多様性の保全、地域社会との連携、枯葉の回収と腐葉土等での利用等
	18. <u>薪ストーブ等、バイオマス燃料の活用を進める</u>	間伐材等を再生可能エネルギーとして利用する
	19. <u>建物や調度品等の木材利用を推進する</u>	住宅・家具に利用・再利用する事で炭素を長期間にわたり貯蔵することになる
	20. <u>沿岸の藻場の再生等のブルーカーボン対策に参</u>	ブルーカーボン:沿岸の生態系が光合成でCO ₂ を取り込む、藻場(海藻、海草)の再生等

	加する	
--	-----	--

(6) グループ対話

情報共有を受け、グループ全体で、「分からなかったこと・もう少し聞きたかったこと」を共有し、話し合いを行った。

(7) 質疑応答

グループ対話で共有された質問の中から各グループで1つ程度質問を選び、全体に発表した。なお、今回の質疑応答は、事務局としてお答えするが、今後のテーマを絞り込んだ討議の段階においては情報提供をお願いする専門家を招くので、その段階でさらに詳細に説明することも考えている旨の説明の下に以下のとおりの質疑応答が行われた。

回答は、事務局の柳下氏、と大磯町の磯崎氏が行った。質疑応答の概要は次のとおりである。なお、回答できなかった質問については、今後のディスカッションの中で情報共有できるように検討する。

A.住まい

質問1: 公共施設に太陽光パネルが設置されていないのはなぜか。

今後のディスカッションでの情報共有を検討

質問2: 再エネ電気プランについての情報がほしい。

回答(柳下): 本日の説明資料の資料2のパワーポイントのp8にURLが示されており、そこから具体的な情報を得ることができる。

質問3: 再エネに切り替えるとなぜ効果があるのか。脱炭素になるのか。

回答(柳下氏): 火力発電では、化石燃料(石炭、石油、天然ガス)を燃料とする。いずれも主成分が炭素であり、炭素を燃やすことを通じて、大量の二酸化炭素が発生する。それに比べ、再エネと呼ばれる太陽光、風力、地熱、水力発電では、設備を作る際に間接的に二酸化炭素の排出はあるものの、稼働中に二酸化炭素が排出されることはない。化石燃料の火力発電と再エネでは二酸化炭素の排出原単位は、1:10とか1:30といっても過言ではない程度の差がある。必要に応じて実際のデータを共有し、第4回で詳しくお伝えする。

B.食・消費

質問4: 使い捨てプラスチックの全てが悪いとは思わない。例えば紙ストローは利便性が低い。市の加工でのCO₂排出量はプラスチックより低いのか。

回答(柳下氏): プラスチックが便利であることを否定するものではない。ただし、プラスチックの原料は、現在の技術では原油である。つまりプラスチックを使い続けるということは、そのための原油を採掘し続け、プラスチックに必要な原料を精製し続ける必要があるということ。

原油を採掘すると、「重油」「軽油」「ナフサ」「航空用燃料」「ガソリン」といったもの(まとめて「石油」と呼ぶ)が出てくる、こうして分けた中のナフサをプラスチック原料としている。必要なものだけを採掘して、残りは埋める・捨てる、ということではできないため、プラスチック原料の採掘をするということは、付随して産出される種々の「石油製品」の消費を継続しなければいけないことにつながる。そして石油の中で一番重い重油は燃料として発電などに用いられる。結果として、石油系のプラスチ

ックを使い続けるということは、原油を採掘し使い続けることを意味しており、それが石油を使用する社会の仕組み（石油文明）を継続させるものになっている。そのことが、「便利だから石油由来のプラスチックを使えばいい」と簡単に片づけられない理由。

質問5:大磯町の取り組みがよくわからない。例えば「宝の山祭」には参加する場合どうすればいいのかについて、情報が無い。

回答(磯崎氏):これまでごみの周知啓発をメインとしていた「美化センターフェア」というイベントを拡充し、環境全般についてのイベントとして取り組みを始めたのが大磯町環境フェア「宝の山祭」です。環境活動を行っている地域団体や企業に出展いただいている。例えば、トヨタ自動車が車をつくる途中で余ってしまうレザーシートの端材でクラフトのキーホルダを作るワークショップなどがあったりと、環境活動をしているブースがたくさん設けられているイベント。

11月9日(日)に実施予定。パンフレットは全戸配布予定で、町のホームページでもご紹介予定。

質問6:ごみ処理量の推移でごみが増減と記載があるのに、なぜプラスチック・ペットボトル量が増加となっているのか。(資料1スライド26)

回答(柳下):家庭での分別の結果、大きく捨てることにつながる「ゴミ」と、資源化される「資源ゴミ」とに分けることができる。資源化・分別が進展した結果、ごみ量が減り、一方で資源化される容器包装プラスチックやペットボトルなどが増加することは大いにあり得ることです。

質問7:食肉中心ではない食生活を勧める項目があるが、肉をとるのと、魚をとるのとで二酸化炭素の排出量の差があるのか。

回答(柳下):牛肉を消費することを控えようという項目は、牛の飼育を行うときに発生する牛の「ゲップ」に含まれるメタンに関係している。メタンは同じ量の二酸化炭素に対して温暖化する効力が25倍とはるかに大きく、地球温暖化に大きな影響を持つ要素。そのためこの項目は二酸化炭素ではないが、地球温暖化への影響に関わるアクション。

質問8:「食品ロスをゼロにする」とは具体的にどういうことか。具体的な基準があれば知りたい。

回答(柳下):食品廃棄物は、大きく食品を生産する場、販売・流通の場、消費する家庭、と分けられる。生産段階や流通段階に対しては、「食品リサイクル法」という法律の下に、リサイクルが義務付けられており、コンポストの活用や飼料・肥料への活用等が行われている。食品の流通の一番下流である一般家庭ではあまり実践されていない実状があると考えている。より詳しくは、フードバンクかながわの方、もしくはこの分野の専門家に来ていただき詳細をお話いただくことを検討したい。

質問9:フードバンクかながわは誰でも参加できるのか。

回答(柳下氏):フードバンクかながわの方に来ていただき詳細をお話いただくことを検討する。

C.移動

質問10:ガソリン車からEV車への移行を勧める項目があるが、製造や使い勝手を考えたとき、本当にEV車は脱炭素になるのか。

回答(柳下氏):走行中については、ガソリン車やディーゼル車が二酸化炭素を排出する一方で、EV車は二酸化炭素は直接的には排出されない。ただ、EV車で使用する電気が化石燃料を燃焼

する火力発電など二酸化炭素を多く排出する方法で発電されたものであった場合、EV の脱炭素の効果も低くなってしまう。実際、日本国内ではまだ2023年度において約7割の電力が火力発電によって作られているので、EV 車の効果をより生かすためにも、そこも変えていくことが必須。EV 車の電力について、理想をいえば、ご自身の家庭に設置した太陽光発電の電力で充電することが望まれる。

製造や廃棄の段階でも二酸化炭素の排出があるものの、ここはガソリン車等と同様である。まだ使用電力の発電方法の脱炭素化の課題が残るものの、脱炭素に貢献できるものである。

質問11: 大磯にはなぜ EV 車の充電場所が少ないのか。

回答(磯崎氏): 過去に大磯町役場に EV の充電ステーションを設置していたが、EV の普及啓発の一定の役割を終えたことに伴い、数年前に撤去した。それ以降は民間事業者の展開に任せている状況なので、理由については把握していない。

質問12: 交通空白地の人たちの考えや要望は行政に上がっているのか。

回答(磯崎氏): 以前公共交通の担当であった経験から共有。交通空白地の住民の方には十分なアンケートやヒアリングをしたうえで、補助路線バスや乗り合いタクシーの取り組みを行っている。丁寧にご意見を伺い、反映させるようにしている。

質問13: 徒歩で買い物をする場合、どれくらいが徒歩とする基準なのか? スーパーが近くにない。LUUP (シェアリングサービス) のようなものがあるといいのでは?

回答(柳下): こうした議論は是非、第4回会議での討議において意見を交わしていただきたい。

質問14: ネットでスーパーの買い物をしたら、結局自分の移動が少なくなる代わりに配達する人の移動が増えるだけで結果的に意味がないのではないか。

回答(柳下): 一家庭ごと配達が行われる形では確かに効果がないかもしれないが、生協のように複数の配達先をまとめて配達するようなシステムであれば当然に効果がある。

D. 吸収源

質問15: 「薪ストーブ等、バイオマス燃料の活用を進める」とあるが、薪ストーブで煙を出したらだめなのではないか。

回答(柳下): 大磯町の HP においても、薪ストーブの利用における留意事項が明記されており、「適切な利用により、近隣に対する迷惑をかけないこと」が謳われている。

E. その他

質問16: 若い人たちへの脱炭素教育の取り組み状況は?
今後のディスカッションでの情報共有を検討

(8) グループ対話

1 グループ10~11人にグループ編成を変更し、机を再配置。グループワークの初めには「呼ばれた名前」と「住んでいる地域」を話し、自己紹介を行った。

次に、グループの中で20項目の「脱炭素アクション」から、第3回会議までの間に各参加者が実

際に挑戦する3つの項目の分担を決める作業を行った。それぞれ「住まい」、「消費」、「移動」、「吸収源」の各4分野のなかで、「A:すでに習慣になっている」、「B:時々取り入れているが、継続するのは大変だ」、「C:機会があれば挑戦してみたい」、「D:行動に移すのは難しそうだ」の4段階で評価をした前回の記録をもとに、以下の手順で担当を決定し、呼ばれたい名前を記入した付箋をテーブルに1枚置いた「脱炭素アクション20項目分担シート」の上に貼っていった。

ステップ1	自己評価で「B:時々取り入れているが、継続するのは大変だ」、「C:機会があれば挑戦してみたい」と評価した項目から、全員が2つ選択。異なる分野から、1つずつとする。
ステップ2	自己評価で「A:すでに習慣になっている」と評価した項目（特に、習慣化している人が少ない項目）で、実践している経験や課題を報告できるものがあれば、1つを選択。
ステップ3	自己評価で「D:行動に移すのは難しそうだ」に該当する項目（特に、困難だと考える人が多い項目）で、「がんばって挑戦してみるよ!」というものがあれば、1つ選択。
ステップ4	ここまでで、まだ2項目しか選んでいない参加者は、あらためて、「B:時々取り入れているが、継続するのは大変だ」、「C:機会があれば挑戦してみたい」と評価した項目から、1つを選択。（まだ選択していない分野から選択する）
ステップ5	グループ全体で、20項目の分担バランスを確認し、必要に応じて調整を行う。

(9) 脱炭素アクションへの取り組み方

脱炭素アクションへの取り組み方と結果の共有方法について稲田氏から説明を行った。参加者は会議翌日（8月25日）から10日間前後、担当するアクションを実践し、その後フィードバックシートの記入、提出を行う旨が周知された。フィードバックの提出方法は、オンライン（E-kanagawa フォーム）または郵送で事務局まで送付する2つの方法がある。郵送で回答を送付した参加者にはその次の会議にて、同額の切手をお渡しする方法で対応する旨が補足された。日程、期間の詳細は以下の通り。

- ・脱炭素アクションの実施期間：8月25日(月)から約10日間（概ね9月4日頃まで）
- ・フィードバックシート記入期間：9月5日(金)頃から9月10日(水)
- ・フィードバックシート提出締切：9月10日(水) ※ 郵送の場合は、当日消印有効。

(10) チェックアウト

グループ内で、今日の感想を共有を行った。

(11) 閉会 / 放課後タイム(希望者の歓談時間)

終了後から16:30まで自由参加で年代別グループでの交流を行い、自己紹介や会議への参加、会議の今後等について歓談した。